

トラブルがもとで転院に至った透析患者の、

受け入れ側の対応について

長崎腎病院 長崎腎クリニック

○藤原久子 林田めぐみ 丸山祐子 澤瀬健治 佐々木 修 一ノ瀬 浩
橋口純一郎 李 嘉明 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

維持透析現場での医療者と患者・家族の信頼関係は微妙であり、様々なトラブルにより一旦悪化し、関係修復できない場合は別施設への転院となる場合がある。この様な経緯で転院した患者を受け入れる側ではどのような対応が望ましいのか？今回当院の4症例を報告し考察する。

【症例】

過去5年間で他院から当院に転入した263名のうち、トラブルが原因と推定される転入患者は8名（男性6名、女性2名、平均年齢59歳、転入時の平均透析歴3年）であった。うち、人格障害を含む精神科医でもコントロール困難な4名を除く4名の対応法としては、1. 前医からの情報収集（特にトラブルの内容）、2. 転入時オリエンテーションにて患者心理・環境等の把握、3. キーパーソンの確保と個別面談、を基本とした。当院での初期治療方針を決定する上では、前医でのトラブル内容を最重要事項とし、患者が再び同様な問題で悩むことのないよう十分な注意を払った。この結果、転入患者の全員が現在のところ当院で通院透析を継続している。

人格障害や統合失調症など重度の精神疾患を有する患者は別個の対応とし、最初から精神科医との連携に加えて、警察や保健所など外部の公的機関の協力は不可欠と思われるが、この場合においてもキーパーソンの確保は必須と思われた。

【考察】

医療機関でトラブルにより医療者と患者の関係が生じる場合、多くは些細な事項の積み重ねで信頼関係が損なわれるケースが多いと考える。よって、新しい施設に転入する患者は、人間関係を『リセット』することを願っている。この場合、前医でのトラブルを無視することは得策でなく、患者が傷ついたことを再び起こさないことを約束することで、患者との信頼関係は生まれると信じる。